農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

臺灣農事報第二五八號別刷

臺灣に於ける珈琲栽培に就て

臺灣總督府中央研究所
嘉義農事試驗支所

（代膳寫）

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

臺灣に於ける珈琲栽培に就て

貴島豐智

珈琲は「カカオ」茶と共に、世界三大飲料の一にして、其の消費額は年々增加し來り、我國に於ける昭和元年の輸入額は、實に百二十萬八千圓餘に達し、大正十二年の輸入額四十八萬圓に比較すれば、約二・六倍の增加にして、如何に最近一般嗜好の激增せるかを窺ふに足るべし、故に之れが對策を講じ、國產を以て廉價に自給するの必要を認むるも、我國內地に於ては、其の生產なし。珈琲は熱帶の原產にして、高溫地方にあらざれば栽培困難なり、大氣濕潤にして、蔭影の地を好み、土質は砂土、重粘土等を除くの外、各種の土壤に適す。山麓傾斜地にして心土に砂礫を混じ、排水良く、肥沃且つ濕氣を含む蔭影の地は最良たり。余は先般東部地方を旅行せし際、山腰地帶の傾斜地、谿谷地、臺地、及び平地に亙り適地の多きを認めたり。

本島に於ける從來試作の成績は、元恒春熱帶植物殖育場にては、種子發生後、滿二箇年目より結實し、滿四箇年目より一株六十匁以上、滿六箇年目には百二十匁以上の乾燥皮付珈琲仁を採收せりと云ひ、臺北農業部に於ては、滿六箇年目より同樣の成績を得たり。

中央研究所嘉義農事試驗支所に於ける試作品種は、「アラビヤ」、「リベリヤ」、「エキセルサ」、「アルウイミンシス」、「デイボスキ」、「ラウリホリヤ」、「ジヤマイカ」、「ブラジル」等にして、後者三品種を除く外は、何れも結果樹齡に達せり。而して「アラビヤ」種最近五箇年の成績は極めて良好にして「ブラジル」、「ジヤワ」等の主產地に比較し、遜色なきのみならず、肥培管理宜しきに於ては、遙かに之れを凌駕するの成績を示せり。

珈琲の樹齡と果實收量との關係

樹齡	反當收量（封度）			開花期			收穫期		
	生果	外果皮を去りたる乾果	內果皮を去りたる乾果	初	盛	終	初	盛	終
四年生	1,140.3	323.6	242.7	二月上旬	四月上旬	五月上旬	九月上旬	九月、十月上旬	一月上旬
五年生	987.7	214.9	182.7	同	同	同	同	同	同
六年生	2,938.3	743.8	632.3	同	同	同	同	同	同
七年生	2,599.3	633.7	538.6	同	同	同	同	同	同
八年生	3,370.7	882.6	661.9	同	同	同	同	同	同

前表の成績を見るに、四年生の收量二四二封度を示し、爾後樹齡を加ふるに從ひ、收量增加し、六年生以上は特に著しく、八年生に於ては六六一封度强に達し、原產地に於ける一英町五〇〇封度乃至一、二〇〇封度の收量に對し、遙かに良好なり。

東部地方に於ては、臺東廳が大正元年殖產局より「アラビヤ」種子の配布を受け、現在臺東支廳卑南區呂家警察官吏派出所構內に植付けたるもの最も古く、樹齡十五年前後、根廻り一尺位のもの十本あり。東部一帶殊に花蓮港廳豐田村に普及せる珈琲樹は、前記呂家產のものを繁殖せるものなり。今是等成績の概要を示せば左の如し。

東部地方珈琲試作成績

試作地名	樹數	樹齡	一本當收量（封度）
臺東支廳呂家	10	15	2.5
同	5	7	1.5
臺東廳農會農場	50	3—4	—
花蓮港廳豐田村	300	10	2.5
同	3,000	4	—
同	50,000	2	—

豐田村に於ける珈琲栽培戶數は十三戶にして、其の主なるものは船越與曾吉氏二甲步、增田宇八氏一甲步なり。其の他は宅地を利用し

二十本內外を栽培し、各戶共に苗の養成中にして、其の總數五萬本に達す。一般の生育狀況は、宅地及び山脚地方に栽培せるものは、成育良好なるも、平地砂礫地に栽培せるものは不良なり。

珈琲の栽培は之れを他の熱帶果樹類に比較すれば、粗放的にして可なるも、果實の採收は總て指頭により摘果するものなれば、勞銀の比較的低廉なるを要す、故に本島は主產地に比し最も經濟的に生產し得るの素質を有し、其の乾果は貯藏に耐え、取扱容易にして、農家各戶に二三十本內外を栽植し、副業的生產により商品たり得る價值多し、今假に前記東部地方に於ても、全農家の宅地栽培を奬勵し、又別に企業的に一千甲步の珈琲園を設置し得るものとすれば、數箇年後に於て、我國珈琲輸入年額百二十萬圓と同額に達せしむること敢て夢想とのみ稱すべからず。全臺灣に於ける適地を想像すれば產業的價值蓋し大なるものあらん。

耕種法、珈琲は種子にて繁殖するを普通とす苗床は排水良き肥沃なる蔭影地を選み叮寧に整地し種子を一晝夜浸水し畦幅四寸株間一二寸或は方二、三寸位の點播となす一坪五勺乃至一合甲當苗床十坪を要す、播種期は春期（二月乃至四月頃）及び秋期（十月乃至十二月頃）とす。

種子は新鮮なるを可とし四十日前後にして發芽し發芽步合五〇%內外、種子一合を以て「アラビヤ」は一八〇本「リベリヤ」は一〇〇本の苗を養成し得べし。苗は四寸位に伸長したるとき半庇蔭の苗床に假植し一尺以上に成長したるとき（發芽後九箇月乃至十二箇月）本圃に移植す。

本圃栽植地は過乾の砂地重粘の濕地を除けば平地又は傾斜地の何れにも成育良好なり、栽植本數は甲當「アラビヤ」二五〇〇本乃至三〇〇〇本「リベリヤ」は一五〇〇本乃至一八〇〇本、定植後三、四年間は庇蔭、防風、其他の目的にて綠肥用「クロタラリア」又は銀合歡

を條播し尚ほ日射激しく過乾に失する地形にては成長後と雖銀合歡其他の庇蔭木を點植し又は他の果樹類を混植するを可とす。

當支所に於ける施肥は年一回とし一、二月中に之れを行ふ樹齡四、五年生のものは反當施肥量窒素、燐酸、加里各一貫匁樹齡六七年生のものは各一貫八百匁とせり。珈琲の加工法は極めて簡易にして熟果を摘採し臼又は肉挽器等にて外果皮を破壞したる後更に外部に附著せる粘狀物を除去せんがため之れを水中に一兩日間放置醱酵せしめたる後十分揉み、清水にて洗滌したる上一兩日間日乾し更に薄き內種皮を前記の方法にて剝離し篩別し珈琲仁を得、之を飮料に供するには珈琲炒器又は口廣の鍋を用いて三十分內外炒り稍濃狐色を呈するに至りたるものを珈琲紛碎器にて粉末とし飮料用に供す、珈琲の風味は數品種を混合調味するを可とし又果實は二、三年間貯藏の上加工するときは風味を增すと云ふ。

前述の如く本島に於ける珈琲は、產業的に極めて有望なるのみならず、殆んど半歲に涉り香氣ある白色の花を密生し、又更に一箇年を通じ綠色、黃色、紅色等の美果を結び觀賞に値し、熟果は簡易なる加工法により飮料に供せらる等、家庭的作物として、價値大なるものなり。(終)

(於中央研究所嘉義農事試驗支所)

農業部農業試驗所
TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE
1895